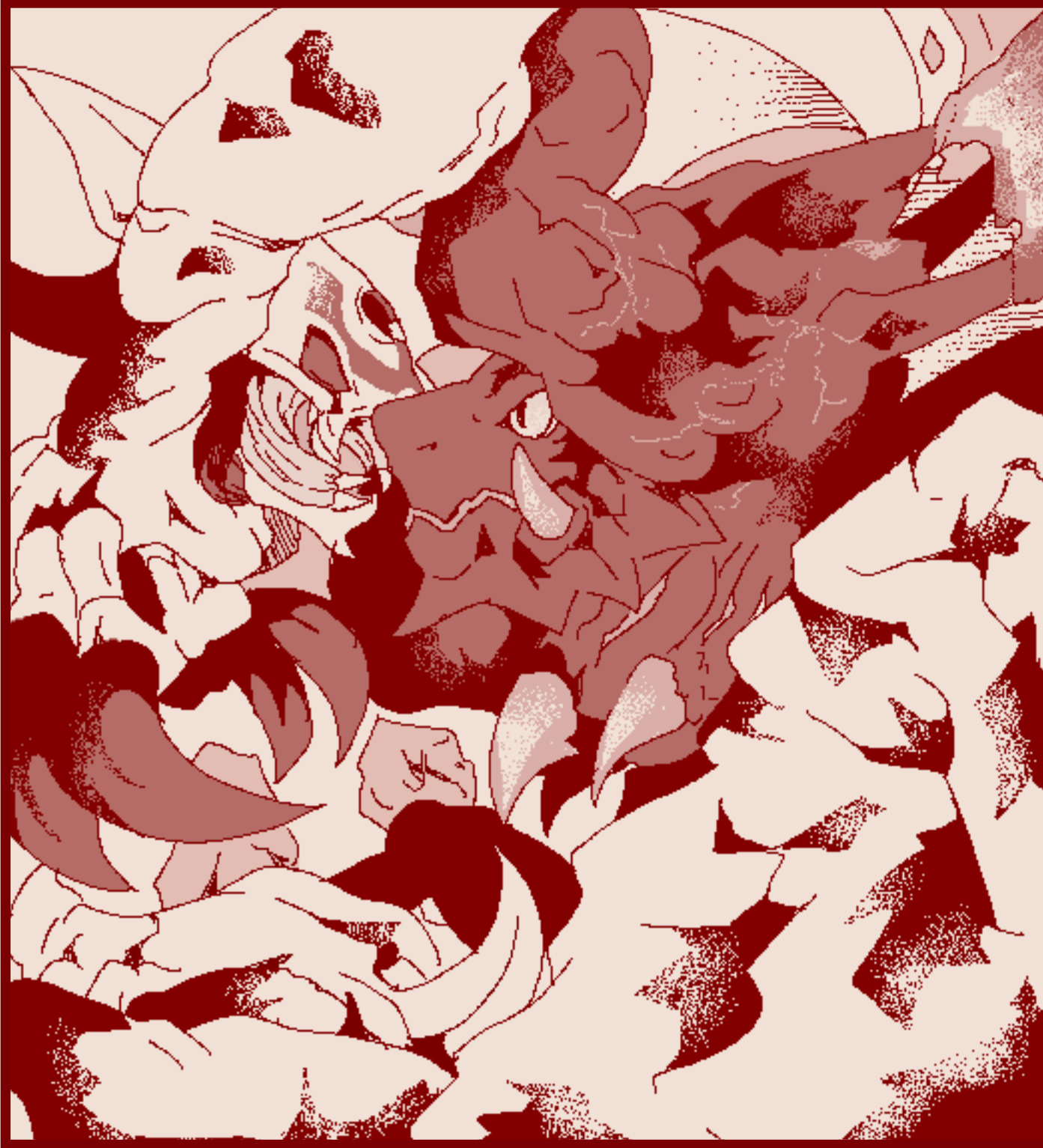


「麦茶安いですよ～！冷えてますよ～!!」

「どうですか～」

炎天下の鉱山地帯で勇太達は多くのタイマーとデジモン相手に麦茶を売っていた。  
なぜこうなったかというところ…但し



轟音と共に岩を砕き巨影が2つ現れる。

スコピオモンとラヴォーボモンがお互いに組み合い押し合っている。

「うわ!？」

ラヴォーボモンが力負けし、地面に叩きつけられる。

スコピオモンが尾の針を突き刺そうとした瞬間上空から無数の黒い蝙蝠がスコピオモンを飲み込んだ。

「ダークネスウェーブ！」

レディーデビモンが上空からスコピモンを止めるように技を放った。

「勇太!ラヴォーボモン!今よ!尻尾のリング狙いなさい！」

何者かがデジモンを操る為の黒いリング。

それを破壊するためラヴォーボモンが立ち上がろうとするがそのまま起き上がれずヴォーボモンへ退化してしまう。



「ごめん勇太やっぱり前の進化みたいに力出ない…」

「ヴォーボモン！」

勇太はヴォーボモンに近寄り抱き抱える。

その隙を突いてスコピオモンは地中に潜り姿を消してしまった。

「お疲れ様ごめんね…」

勇太は力無く呟いた。

「何やってるのよ！この馬鹿達!!!」

光がドスドスと聞こえるような大股開きで近づいて来た。

「ごめん光～」 「ごめん…」

「…ふん！まあいいわよ。でもあいつどうするの？」

目に見えて疲れているヴォーボモンとしょげてる勇太を見てバツが悪くなったのか怒るに怒れなかったようだ。

「でも、食料ももうないし一回街でまたアルバイトしてから探すしかないよね。

いつ出て来るか分からないし先にこっちがバテちゃ元もこうもないしね。」

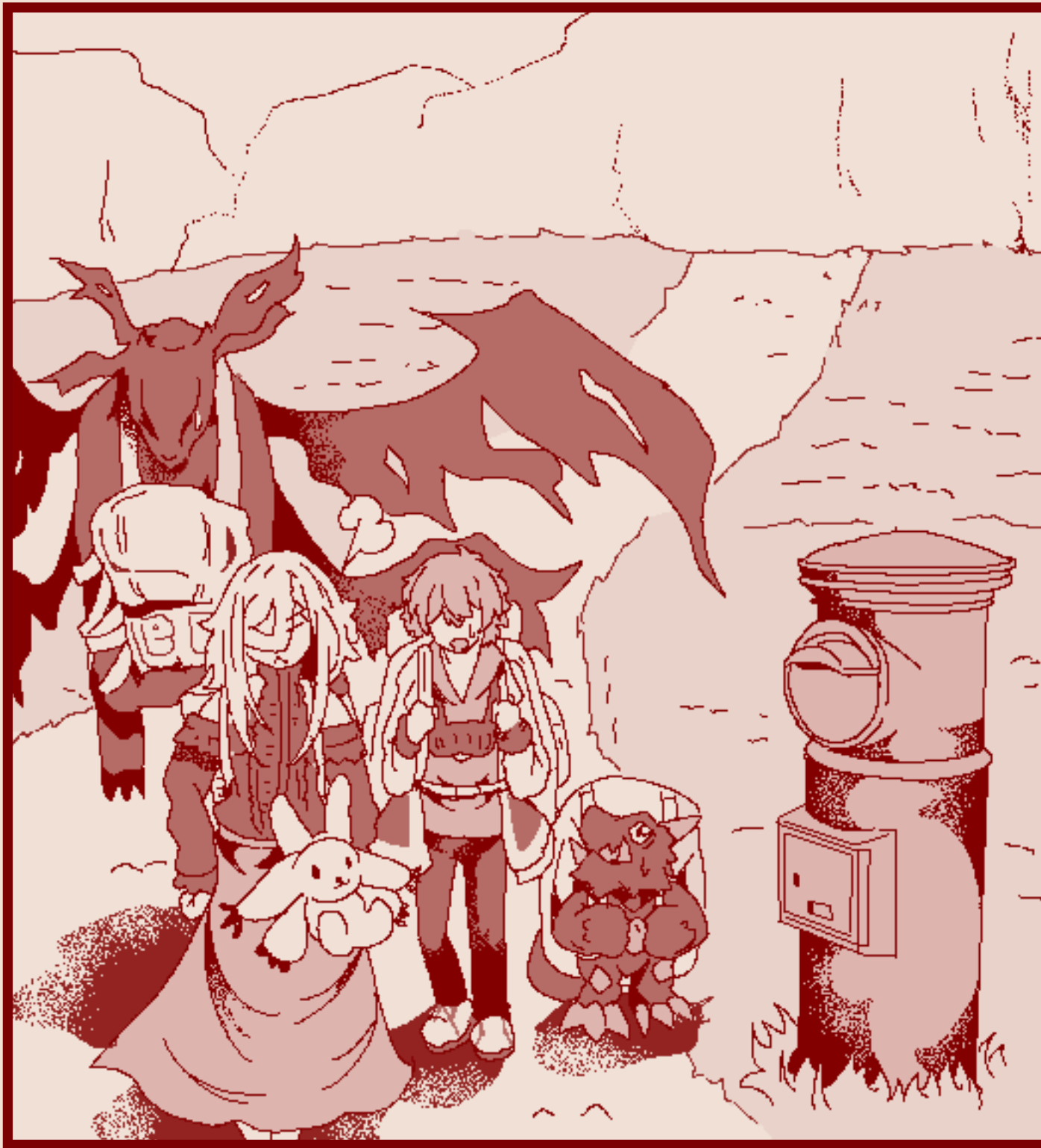
「しょうがないわね。じゃあ先に街行kwよ。」

「はい」

勇太達がこの地方へ来た理由は黒いリングを付けられたデジモンを追う以外にもう一つあった。

今から向かう街には埋蔵金があるという伝聞がまことしやかに囁かれ多くのテマーとデジモンが集まっているという事であった。

ここで自分達の旅…各地で白いリングに操られているデジモンを助ける目的を手伝ってくれるひとを探す。というものであった。



「しかし、すみれのくれたこの追加の機械、あんま役に立たないわね。」  
前の街で出会った鳥藤 すみれから貰ったデジヴァイスに付ける追加のデヴァイス。  
デジモンとパートナーとなったばかりで上手く進化させられない新人に使う物を上手く進化させられない勇太は貰っていた。  
ジジモン達のいた街でラヴォーボモンに進化させてからも勇太はヴォーボモンを進化させる事はできていなかった。  
ただ、この追加デヴァイスでは進化させる事はできてもデヴァイスなしで進化させた時と比べ能力も劣り消耗も激しかった。  
「ごめん…」  
「だーから怒ってないんだから謝るんじゃないわよ！怒るわよ！」  
「もう、おこってるよひかり…」





「ん？何これ？」

スコピオモンとの戦闘で大通りから外れていた勇太達は道に戻ろうとした時に何かなっている木を見つけた。

「何これティーパック？」

紙に何か茶色の物が詰まっているものになっている木があった。

デジタルワールドの畑には肉が生える。

そんなように、デジタルワールドでは現実の法則もあったものではないのを勇太達もう分かっていた。

「…」

4人とも馬鹿の事をしていると分かっているので無言であったが、誰もその行動を止める者はいなかった。

水筒を開けひとつ木からもぎ取り、出汁を取り4人全員顔を見合わせて一気に飲む。

「『『麦茶だコレ！』』』」

「『…麦茶って何？』」

ヴォーボモンとデビドラモンは顔を傾げて聞いた。

「閃いわよ！あんた達！」

光は何かを思いついたように大声を出した。

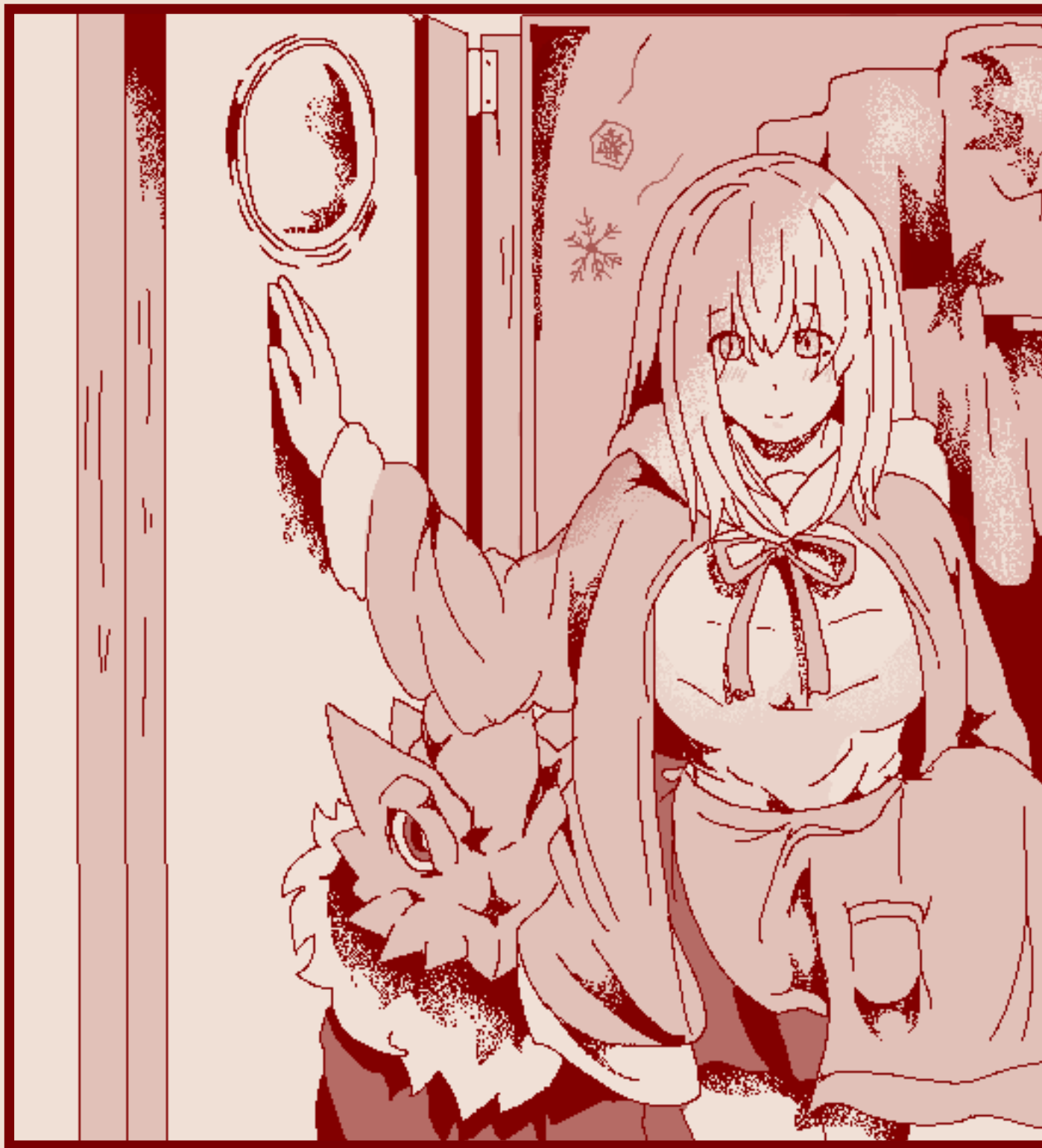
「いい？昔トー横でドヤ顔で語ってるおっさんがいたのよ！」

「『『はぁ…』』」

そのおっさんが言うには昔アメリカで滅茶苦茶金が取れていっぱい掘る奴がやって来たそうよ！

でも1番儲けたのは誰か分かる!?そうよ！道具とかを売ってた奴よ！

このクソ暑い中訳わかんない物しかないデジタルワールドじゃあみんなこの味の懐かしさに惹かれる筈よ！つまりガッポガッポなのよ！」



…と言うわけで今に至る。

しかし、現実はどうも甘いではない。

麦茶は他の競合他社との比べて遅れてやって来た勇太達には中々厳しい結果となっている。

初期の目算は1週間もあれば纏まったbitが稼げると思っていた。

勿論これは光の取らぬ狸の皮算用然り無理と分かっていたがそれでも勇太も2週間もあれば大丈夫かと思ったが3週間から1月は掛かりそうであった。

更に勇太としてはメインの目的である協力者も埋蔵金の掘り当てが目当てに来てるのだが当たり前ではあった。

しかしながら悪い事ばかりでもなかった。

勇太の人当たりの良さもあってか一部のティマーからは顔を覚えられ目的地の情報も得られた。

これは旅を続ける中で頼るつてを少しでも得られた事になる。

そして、もう一つ

「じゃあ私氷代持ってくから」

「おつかれ勇太ヴォーボモン」

「お疲れ様光、デビドラモン」

「おつかれさまー」

埋蔵金掘り当てを目論むティマー達が集まって出来た街の中で氷で出来た建物のチャイムを光は鳴らした。

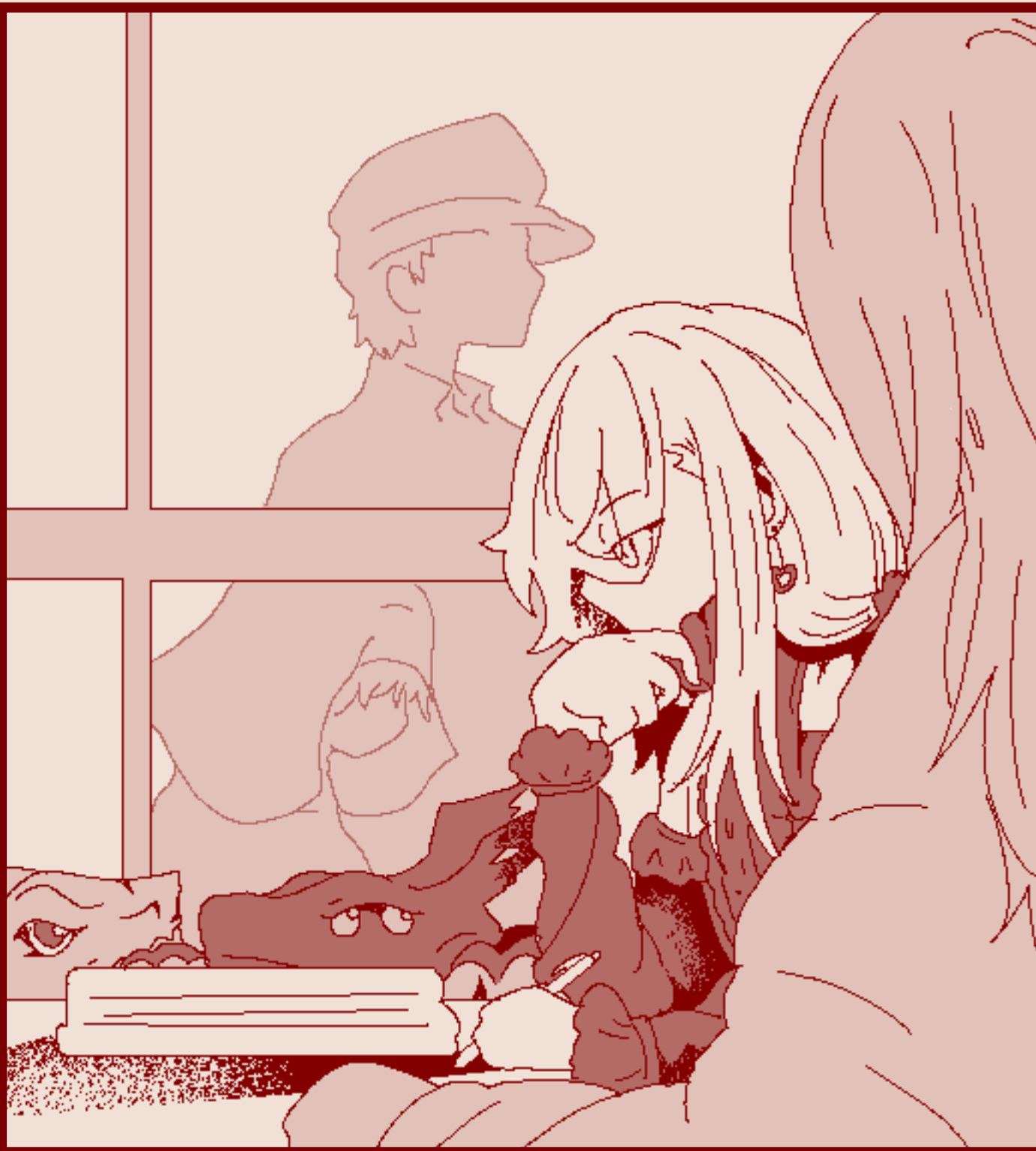
「いらっしゃい光ちゃん。今日も暑いね〜」

「ん…」

もう一つ、この街に来た時ただ水出しにした麦茶を売ろうとしていた勇太達に声を掛けてくれた人がいた。

霜桐雪奈であった。

それからは勇太達にほぼ無償で氷を分けてくれ、毎日昼過ぎに氷代を持ってくる光に勉強を教えてくれていた。



雪奈のパートナーであるブルコモンが作った氷の家は外の暑さとは全くの異界とっていい涼しさがあつた。

雪奈はここでブルコモンの能力を活かした飲食店をしていた。

「光ちゃん飲み込み早いねもう小数まで完璧だね」

「…別に雪奈の教え方が上手かっただけだし」

机に顔を乗せて涼むデビドラモンとブルコモンと穏やかな時間が流れていた。

「ねぇ雪奈もデジタルワールドに漂流しちゃったんでしょ？」

「うん？そうだよ？」

「…やっぱり親に会いたい？」

ここに来る前光は恐らくはティマーとパートナーのデジモンであろう2人を見た。

軽口を言う女性型のデジモンにそれをいなす生真面目そうなティマー。

だが、そこには不快感はなく心地よさそうな雰囲気を感じた。

それを見た時不意に光自身が失くしたと思っているものを感じ取ってしまった。

多くのティマーには帰るべき家がある勇太もそうだ。

光の境遇を知ってから不用意に家族の話は控えてるが随所に溢れる話から温かな家庭がある事が伺えた。

「そうだね。こっちにも慣れたけどお母さん達に会えないのは嫌かな？光ちゃんもそうでしょ？」

「…私は分かんない」

「そっか…」

「家族ってそんなにいいものなの？」

「…難しいけどひとそれぞれかも。でもこうやってブルコモンと出会って別に自分を産んでくれた血のつながりだけが家族じゃないって思ったかも。

光ちゃんと勇太君。デビドラモンちゃんやヴォーボモン君見てるとなんだか…家族みたいって思うな。」

「…そっか」

「ひかり？」

雪奈は何かを感じ取ったのか会話が途切れてしまった。

少しの沈黙の後光は口を開いた。

「…ねぇ雪奈は勇太とヤッてるの？」

「ぶふ!!!!!!!???????」

光の唐突な言葉に雪奈は含んだお茶を思いっきり吹き出した。

「え!!!!?え!!!!?何言ってるの!!!!????」

雪奈が今までに聞いた事のない大きな声を出した事に光は質問をした側であつたのに動揺して口箆っている。

「な…なによ…」

「…おほん。えっとごめんね？何で勇太君と私が…その…ね？」

「…最近勇太が夜になるとこっそり部屋から出て行くから…その…ここで仲良いのって雪奈だから…」

いつも威勢のいい光が俯いてボソボソと言葉を紡ぐので雪奈はそこから何かを感じ取った。

「え？…ああ～…えっとね！光ちゃんっ勇太君と私はそんな関係じゃないしそもそも夜に来た事なんて一度もないよ！」

「知ってた？」

「ねてたからわかんない!!」

「…別に大声で言わなくてもいいわよそんなんじゃないし」

怪訝そうな顔で光は言うが本人も自覚がないのか少し安心しているようにも見える。

「でもじゃあなんでよ？」

「それは…その」



夜遅く勇太は同じ部屋の別のベットに寝ている光やデビドラモン、同じ布団のヴォーボモンを起こさないようにこっそりと出て行った。

それを見届けた光も勇太の後を追いついてデビドラモン達を起こさないようにこっそりと出た。

光は途中で雪奈と合流して勇太の後を追った。

勇太は繁華街ではなく街の外れの方へコソコソと歩いて行く。

「街外れ？繁華街とかじゃなくて？」

「…やっぱり女と逢引きしてるのよ」

「勇太君に限ってそれはないと思うけどな…」

勇太は周りをキョロキョロと確認した後何かゴソゴソとしている。

「！えっ!? あああ!!?? ダメダメ光ちゃん帰ろ! ダメダメ!」

「ちょっと目隠すんじゃないわよ! 違うわよ! オナるならあんな身体全体動かさないわよ!」

「ちょっと! 光ちゃん!」

雪奈が顔を真っ赤にして光を宥めるがそれを払って勇太が何をしているのか目を細める。

何か大きな声を出している。確認するため雪奈を引き摺って近づいていく。

「ハッ…! ハッシ!」

「あいつ何奇声出してるのよ」

「駄目だよ光ちゃん～男の子はそういうの恥ずかしいのよ～」

「変身!!…駄目だな…今度はブレーザーのポーズでやってみるか」

「…本当に何やってるのかしら勇太君…」

勇太はデジヴァイスを持ちながら特撮ヒーローの変身ポーズを取っていた。

「…」

「別の意味で放っておこ…「何コソコソやってるのよ!」





「うえ!?ひひひ光!?ゆゆゆゆきなさん!!!!??何でここに!!!?」

「心配させて!!!!もう!!!こんなアホみたいな事コソコソ!!!」

「なっ!!!何だよ!!!お…俺が1人で何やってようが光には関係ないだろ!!!」

「まあまあ2人とも落ち着いて…ね?光ちゃんも私だってひとりでやりたい事あるでしょ?」

勇太君も光ちゃんだって心配してたのよ?」

色々と…その言葉はとりあえず雪奈は飲み込んだ。光も思う所があるのかこれ以上の追求はしたくないのか飲み込んだ。

「まあ…うん」

「えっ…あ…その…俺もごめん…」

いつもなら止まらずギャアギャアと言うのをあっさり引き下がったのを見て勇太も波が引いてしまったのか直ぐに冷静になった。

「まあ勇太君が特撮好きって言ってたし恥ずかしい事じゃないと思うけど一声かけてあげた方が良かったかもね?」

「ち…違うんです!その…実は特訓なんです…」

「特訓?」

「これ…」

勇太がデジヴァイスを取り出すと画面に何か鎧のような物が表示されていた。

「これってもしかしてスピリット?」

「スピ…何それ?」

「えっとね…スピリットって昔いた凄いデジモンのエネルギーっていうのが残ってるやつなの。

これを使うと人間がデジモンに変身できるって聞いたの」

「俺…ここに来る時も1人だけ足引っ張っちゃって…申し訳なくて…これ言っちゃうと皆んなに気使わせちゃうと思って…」

「バカじゃないのそんな事…」



光が言いかけた時に突然轟音が響き渡った。  
3人が唖然としてると山からスコピオモンが現れた。  
首に黒いリングが嵌め込まれており以前勇太達が出会った個体だと分かった。  
「もう!こうなるって事よ!バカ勇太!!!」  
「あいつ街に向かってる!?!と…とりあえず知らせに行かないと!」  
2人が走り出しが勇太はその場に止まっている。  
「何やってるのよ!?!」  
「2人は先に行って…ここで特訓の成果を見せる!俺だってやれるんだ!見てて俺の変身!」



勇太がデジヴァイスを構えると手からバーコード上の輪っかの光が現れた。  
「スピリットエボリューション!!!」  
勇太の身体からテクスチャーが剥げるように形が胡乱となっていく。  
鎧が散らばり勇太と重なり合い新しい形になっていく。



「フェアリモン!!」

「「「…」」」

そこに現れたのはほぼ下着姿の女性型デジモンだった。

「なんじゃこりゃあああああ!!!????」

「あ〜うん!聞いた事あるよ!女性型のハイブリット体のデジモンもいるって!」

「なんかついてる!???重い!?いやそれよりない!?ないよ!!そっちの方がヤバイよ!?どうしよう光!!!!??」

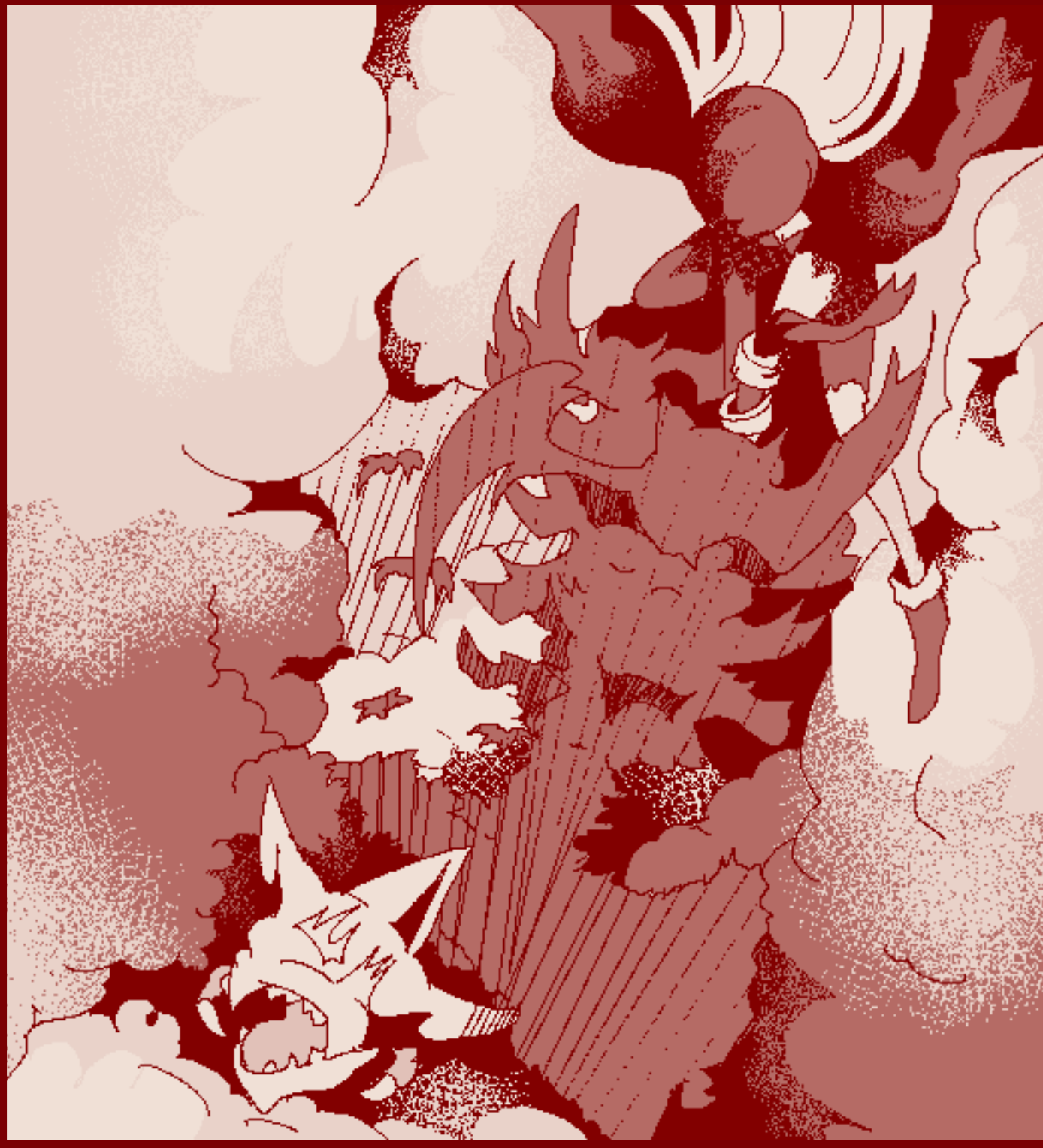
「デカイ声出さなくても聞こえてるわよ!こんのバカ!!!」

「ダメだよ勇太君〜そんな事大声で言っちゃあ!





何事かと思いつまっていたスコピオモンが勇太に気付き尻尾で刺そうと伸ばしてくる。  
「ええいままよ!ふー、ライダーキック!!!」  
勇太は飛び上がり突進しつつ足に力を為飛び蹴りをスコピオモンへぶつけようとする。  
「おおおらああああああ!!!…ごふ!!!」  
が、簡単に叩き落とされてしまった。  
「弱!?ビックリする程弱いじゃない!?」  
「光ちゃん言ってる場合じゃない!助けないと!?」  
「世話が焼けるわね!!あのバカ!!」



「ひかり～!!おっきなおときこえたけど…!」

街からデビドラモンが飛んで来た。

「いいところ来たじゃない!ヴォーボモンは!?!」

「まだねてる!!」

「チッ!…まあいいわ!行くわよ!デビドラモン!!超進化!」

「レディーデビモン!!」

「勇太君!」

スコピオモンが勇太を踏みつけようとしたが、ブルコモンが滑るように勇太を捕まえ離脱した。

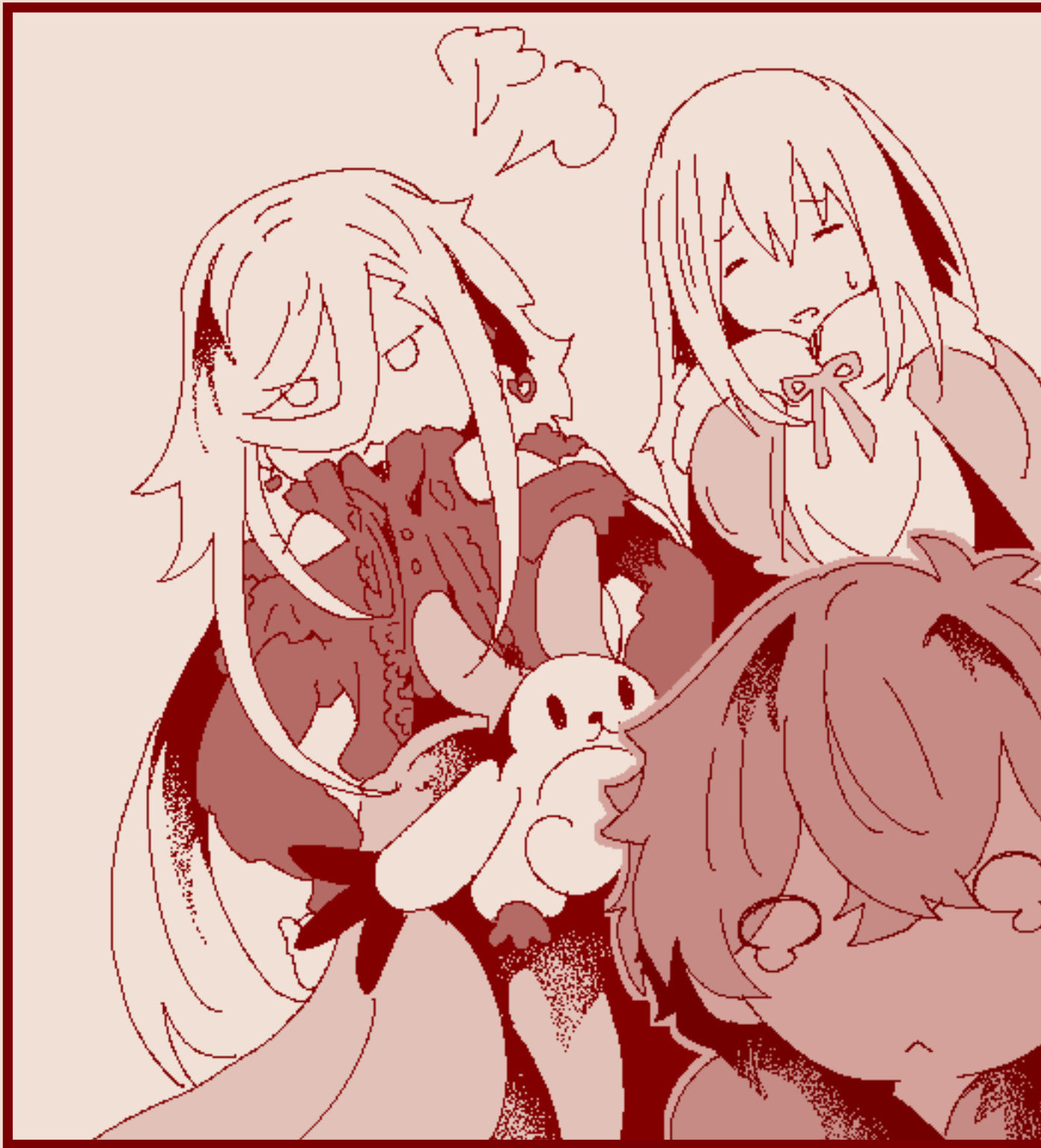
「ブルコモン!」

「今よ!レディーデビモン!」

「ダークネスウェーブ!!!!!!」

スコピオモンの真上に上がったレディーデビモンが無数の蝙蝠を放ちスコピオモンを押し潰す。

ダークネスウェーブの余波でスコピオモンに着いていたリングが割れ霧散した。



スコピオモンも正気に戻り平謝りした後そそくさと地中へ戻っていった。

「…喋れたんだ」

雪奈はポツリと呟いた。

勇太は情けない姿を晒したの気にしてかしゅんぽりと小さく項垂れていた。

「! あっ! ああ! ?」

勇太が手に持っていたスピリットは風化していき霧散していった。

「あ〜スピリットもどきってやつだね。結構こういうの出回ってるって聞いた事あるよ。あんまり強くなかったのもそのせいだね」

「ほんもののスピリットならババさまにもきいたけどたぶんデビドラモンたちもきづくしそうだよね」

「もう! なに! しょぼくしてるのよ! キモいわね!」

「…だって俺…格好悪い…」

「さっき言いそびれたけど…」

「?」

「スゥ〜いつもありがとう!!! 私が体力ないからって半日だけしか働いてないのにあんたはいつも夕方まで頑張って! バックだってデビドラモンやヴォーボモンと同じくらいの重さの…私の分まで持ってくれて! 私のわがままにも何やかや付き合ってくれて! ご飯も私の嫌いなのでできるだけ入れないようにしてくれてるのとか! いつもありがとうって! …いっー回しか言わないわよ!!!」

だから気にすんじゃないわよ! 勇太は役立たずじゃないし! 他の奴じゃダメなの! あんたじゃないとダメなの!」

光が顔を真っ赤にして一気に捲し立てた。

「あら? あらあらあら?」

雪奈が顔を押しえて口元は分からないが目が明らかに笑っていた。

「あ…ありがとう…うん…」

勇太も顔を真っ赤にして俯いてしまった。



「ほら!いつまでもウジウジしないで立つ!」

光が手を伸ばす勇太が手を取ろうとした時足元の変化に気づいた。

「スピリットが消えてない?」

フェアリモンの足元部分がそのまま残って風を纏っている。

試しに勇太がジャンプするとフェアリモンと同じくらい飛び。風を使ってしばらく滞留できた。

「凄い!凄いよ!光!」

「全くさっきまであんなにしょげてたのに現金な奴」

「あははは…」





しばらくして、旅費や備品の備蓄も済み勇太達は街を經つ事になった。

「雪奈さん!ありがとうございました!」

「…ん」

「バイバイ雪奈!」

「バイバイ!!」

「またね光ちゃん!勇太君!私も暫くしたらこの街を經つからどこかでね!」

「勇太!またスピリットでジャンプして!ジャンプ!」

「え〜しょうがないなあ」

「やめなさいよウザいわね!食料飛び散ったらどうすんのよ!」

「「はーい」」

勇太達の旅は続く。